

第5回 多言語対応・ICT化推進フォーラム ～人と技術で伝える、伝わる～ リオデジャネイロ2016大会報告 【ICT視察報告】

発表者：パナソニック株式会社 東京オリンピック・パラリンピック推進本部 副本部長 北尾 一朗氏

リオでの出張報告と弊社の取り組みをご紹介させていただければと思います。

今年(2016年)のオリンピックは8月5日から21日まで、200カ国以上、1万人以上の選手が参加して競技数28競技、パラリンピックについては9月7日から12日間、4300人を超える選手が参加、競技数はオリンピックよりも少ないですが種目数ですとパラリンピックのほうが多く、500種目を超える競技が行われました。リオはブラジル第二の都市ということで、非常に賑わいのある大会でした。



パナソニックは1988年からオリンピックパートナーとしてスポンサーをしており、今回は開・閉会式のパートナーということで、単に機器を納入するだけではなく、演出の企画から運営のサポートもいたしました。開会式のプロジェクションマッピングは、2万ルーメンのプロジェクター110台以上で5方向から投射することで、鮮明な画像を実現いたしました。パラリンピックの閉会式ではそれに加えて大型のLED装置も導入し、プロジェクションマッピングとスクリーンを組み合わせた演出をいたしました。各スタジアムの中の大型映像装置も、単に結果を表示するだけでなく、場内の盛り上げにも活用いただきました。

オリンピックそのものは大変盛り上がったのですが、実際の運営を見ていくと、いくつか課題もあったように感じられました。一つは警備の面です。今回はほとんど監視カメラ等のICT機器はあまり活用されておらず、8万5千人という警察・軍隊の人的警備を中心として、会場内、町中至る所に人が配置されていました。東京ではこういう守り方は出来ないですので、やはりICT機器をしっかりと使った上で、人的警備との連携が重要になってくると思います。また、大会関係者用のアクセスコントロールもありましたが、これもボランティア依存・人依存で、チェックの厳しい方とそうでない方、色々ありました。やはり人に頼るとどうしても個人差が出てしまうので、機械の力を借りるのは重要だと思う次第です。

本日のテーマであるコミュニケーション関連ですが、多言語対応は正直に言うと、リオの大会ではほとんどなかったという感じがいたしました。ボランティアの方は多くいますが、ほとんどがポルトガル語ばかりで、「I speak English」という札を付けている人はそう多くはないです。案内表示についても、サイネージがほとんどなく、すべて看板で、ピクトを使っているのですが、なかなか十分な情報がなく、席を探すのも一苦労といったこともありました。

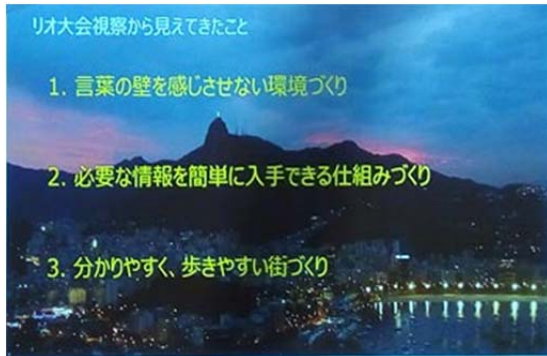
町中に出ますと、ショッピングセンター等にはサイネージも沢山設置されており、広告も含めていろいろな情報が溢れていました。コパ・カバーナでは観光地だけあって、写真撮影ができるサイネージや、暑さ対策でミストが付いているものなどがあります。日本の夏も本当に暑く、特に東京は、35度を超える猛暑日が何日もあります。そういう時期に海外から沢山のお客様をお迎えしなければならないので、私どもはこの夏に新橋のSL広場でミストを使ったクールスポットの実証実験をいたしました。

コミュニケーションといえばWi-Fiも大事でして、リオにもWi-Fiマークは結構ありましたが、なかなか繋がりませんでした。やはり繋がるWi-Fiを町中に整備する必要があり、日本も一時期に比べてかなり進んできていますので、このまま2020年にはストレスのない通信環境を整えていきたいと思っています。

パラリンピックについては、アクセシビリティという観点でいきますと、スロープや点字ブロックといったものは、IPC(International Paralympic Committee)の基準に基づいて設置されていましたが、残念ながら点字ブロックの上に障害物があるというような、日本でも時々町中で見かけるかと思いますが、単にハードを整備しただけでは駄目なんだなと思いました。まだまだ日本でも町中で車椅子の方を見かけることが少ないです。

ブラジルは、ハード面でのバリアフリーは遅れているのですが、皆さん親切に声をかけられます。特にボランティアの方は本当に親切で、ハードのバリアフリーもしっかり進めなければいけません。私達日本人がブラジル人の方と同じように海外のお客様をお迎えできるのかということ、考えさせられるものでした。

盛り上げについても、一時期パラリンピックのチケットが売れないという話題もありましたが、本当に沢山の人が入っていて、学校単位で来ている学生さんが、自分の国ではない競技も一生懸命盛り上げていました。次に引き継ぐ東京大会でも、しっかり私達も盛り上げていかなければいけないと思います。



これらの視察から見えてきたこととしては、言葉の壁を感じさせないような環境を作っていくということです。特に日本人はシャイなので、英語で話しかけられると、逃げるか黙るか笑うという対応しかなかなかできませんが、やはり我々としても、しっかりとお客様と向き合うということと、同時にICTの力でそれをサポートしていくということです。情報というのは命です。初めての異国で情報が入手できない、こういう状況は本当に不安になるので、必要な情報を入手できる仕組みづくり、これは外国人の方だけでなく障害者の方にとっても同じだと思います。また、分

かりやすく歩きやすい街づくりといった観点でも、色々な取り組みをしていきたいと考えております。(以下、事例紹介)

今後、様々にこういったICTの機器を活用して、コミュニケーションを円滑する取り組みをしていき、2020年には言葉の壁を感じない、素晴らしい社会を作って東京大会を盛り上げていきたいと考えております。

第5回 多言語対応・ICT化推進フォーラム ～人と技術で伝える、伝わる～

参考資料配布：<http://www.2020games.metro.tokyo.jp/multilingual/council/index.html#m05>